敬虔な仏教国ブータン王国で昨年6月、国際協力機構（JICA）の委託で土砂災害の現地調査に従事していた新潟大学災害・復興科学研究所所長の福岡浩教授（57）が心臓系の急病のため死去した。3月1日、新潟大学附属図書館ライブラリーホールで、土砂災害・防災学のスペシャリストだった福岡教授の功績を称える「新潟大学災害・復興科学研究所　故福岡浩教授追悼シンポジウム」が「斜面災害研究への貢献と引き継がれる学究活動」をテーマに開催され約100人が参加した。（本間眞司）

引き継がれる業績と志

主催者挨拶した後任の河島克久同研究所長は、故福岡教授の業績について、地すべりや土石流などのスペシャリストで、阪神淡路大震災や新潟中越地震、東日本大震災、広島豪雨、九州北部豪雨、熊本地震などの土砂災害現場で調査に当たってきたこと、アメリカ、カナダ、エルサルバドル、ホンジュラス、ペルー、クロアチア、トルコ、フィリピン、ベトナム、韓国、中国、ネパールなどで災害調査や人材育成に尽力してきたことなど紹介。さらに「福岡先生の人柄は非常に温厚で、愛嬌のある先生でした。先生の周りには、いつも楽しい話題と笑いにあふれていました」と述べた。

最後に河島所長は次のように締めくくった。

「新潟大学災害・復興科学研究所では、次の目標として『変容かつ激化する自然災害の機構を解明するとともに、災害に対して適応能力が高い強靭（レジリエント）な社会の構築に貢献すること』を掲げました。その陣頭指揮をとっていた福岡先生を失った痛手は非常に大きいのですが、福岡先生の遺志を引き継いでいきます」

シンポの前半は福岡教授の斜面災害研究について、ベトナムとクロアチアにおける地球規模課題対応国際科学技術プログラム（SATREPS）と、新潟県で実施された裏山雨量計プロジェクトの事例を3人の共同研究者が紹介した。

「ベトナムにおける気候変動の脅威への挑戦」を発表した日本地すべり学会前会長の澤合博貴氏は、同国ダルマチア地方で実施された新潟大学との共同研究の事例を発表。その中で、「プロジェクト期間における福岡教授の貢献は、科学的なものだけでなく、若い研究者と学生の実質的な指導、献身的に取り組む姿勢を間近に見たことでした」と謝辞を述べた。

産学連携の実例を紹介したのは、地元新潟の㈱興和の堀松宗氏。「裏山雨量計プロジェクトの概要と住民の防災意識の変化」と題した発表で、福岡教授が「がけ崩れおっかない指数」の命名者であったことや、寺泊町山田地区（現長岡市）に何回も足を運び地元の人たちと懇談を重ねたことなど紹介した。

シンポ後半では、京都大学で福岡教授の指導を受けた3人の研究者が地すべり研究の最新情報を紹介した。島根大学総合理工学部の汪発武氏は、「留学生に親切だった福岡先生から学んだのは、現場主義、先端技術の開発と応用、データ・情報収集の重要性と総合判断力、それに責任感と使命感、優しさだった」と述べた。

京都大学防災研究所斜面災害研究センターの王功輝氏は、南米アンデス山脈のマチュピチュをはじめ海外での調査研究を紹介。消防庁消防研究センターの新井場公徳氏は、「大学院時代に学んだことが社会に役立つことを実感し、心から感謝しています」と述べた。

学生時代に同じ下宿で過ごした中村泰之・名古屋大学大学院情報学研究科准教授は、「学生時代からの今の職に就くまで、悩みを聞いてもらったり、ましたり、いろいろお世話になりました。専門分野は違いますが、研究者として、人間としての姿勢を教わりました」と語った。

故福岡浩教授追悼シンポジウム

福岡浩教授は1961年、長崎県の生まれ。92年、京都大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士後期課程を修了。93年、京都大学防災研究所助手、96年、同研究所准教授に就任。2014年、新潟大学災害・復興科学研究所教授、16年、同研究所所長に就任。同研究所は斜面防災分野の世界的研究拠点で、国連ユネスコ事務局長から「国際斜面災害研究計画・世界推進委員会による世界的研究拠点（WCOE）」に認定された。同認定は国内の大学では新潟大学のみ。18年6月5日、土砂災害の調査に訪れていたブータンで急逝。享年57。専門は自然災害科学・防災学、地盤工学。

故福岡浩教授追悼シンポウム
土砂災害調査のブータンで殉職
新潟大学

テントに設けられた祭壇

ブータンの土砂災害の調査現地

新潟大学災害・復興科学研究所

安倍晋三首相主催「桜を見る会」での福岡夫妻（平成30年4月21日、新宿御苑）

日本の技術で世界に貢献を
福岡江里花夫人が語る思い出

福岡教授はNHK新潟放送局の防災番組のレギュラー解説者だったことから、ブータンでの急逝をいち早く報じたのも同局のニュースだった。昨年6月、ブータンで急逝した福岡教授の遺体を引き取りに行った福岡江里花夫人に、ご主人の思い出など伺った。

＊　＊　＊

――ブータンでの様子は？

主人が亡くなって3日目の6月7日夕方にブータンに着くと、JICAの庭のテントに主人の祭壇が作られていて、その奥に冷凍処置された遺体が安置されていました。夜7時にお坊さんたちのお経が始まりました。ブータン道路局の人たちは毎晩焚き火をしながら主人の祭壇を4日間、徹夜して見守ってくださいました。

ブータンと日本はとても縁が深く、農業指導者の西岡京治さんがブータンで国葬になったくらいです。西岡さんは海外技術協力事業団（現・国際協力機構）の事業でブータンに日本式稲作を伝授し、28年間ブータンで指導して「ブータン農業の父」と慕われて、現地で59歳で亡くなりました。ブータンは山岳地帯で作物が育てにくいため、日本からビニールハウスや中古の農機具を持ち込んだそうです。

それで主人も、日本からブータンのために来た学者が2日後に亡くなったというので、ブータンの国王と先代の王様が、「遺族の方に出来るだけのことをしてあげなさい」と言われたそうで、私と息子、新潟大学の河島教授と大学事務局員の4人は、空港で政府関係者とJICAの方に出迎えられ、VIPルームに通されて、そこからのタクシーやホテルも全部手配してくださいました。

JICAの方も、主人が亡くなった場所や主人が回ったコース、病院も見せてくださり、インド駐在の日本大使も来てくださいました。

ブータンの人たちに「ブータンを第二の故郷と思ってください」と言われ、一緒に行った長男（16）も「こんなに親切にしてもらったら、ブータンを嫌いになれない」と言っていました。

――ブータンの印象はどうでしたか。

ブータンは世界一幸せな国、やさしい国かも知れませんね。敬虔な仏教国で生き物を殺さないから、ハエを叩くことも絶対ないんです。犬も去勢が追いつかないので野良犬がたくさんいて、たまに噛み付かれるそうです。野生の牛や馬、猿もたくさんいて、まるでサファリパークみたいで、人と動物が共存していました。

主人はいろいろな国に行っていたのに、ブータンは初めてで、すごく楽しみにして出かけました。そんなブータンで主人が亡くなったのも、何か意味があるのか、もしかしたら、先祖がここで暮らしていたのかなって思ったりしました。

――京都大学時代に留学生の世話をよくされていました。

指導教官だった佐々恭二先生のお父さんが京大防災研究所を作った第一人者で、佐々先生はとても厳格な方でした。だから主人は、留学生のお世話など佐々先生のやなんでいましたが、海外の被災地に行くことによって、日本がいかに恵まれた国か自覚できるからです。新潟大学ではNU―GLOV（ニューグローブ）という学生サークルの顧問になっていました。

主人がJICAの仕事を引き受けたのも、日本の優れた科学技術を世界に活用したいという思いが強かったのだと思います。

――新潟への思いは？

2014年に新潟大学に来て、16年5月に災害・復興科学研究所の所長になりました。新潟で教授になり、いろんなことがやれるとすごく意気込んでいました。土砂災害の研究所は、東大、京大、新潟大、東北大など限られています。

日本近海の海底にある資源のメタンハイドレートにも関心が強く、8年ほど前にサンフランシスコで毎年開かれるアメリカ地球物理学会連合（AGU）の学会で青山繁晴参議院議員（当時・独立総合研究所取締役社長）と、メタンハイドレート開発の先駆者である青山千春博士（現・東京海洋大学准教授）にお会いしました。主人はテレビにもよく登場していた青山先生の大ファンでしたからすぐに意気投合して、以来、夫婦でお付き合いするようになりました。青山さんが国会議員になる前の講演で「今度、京都大学の福岡先生が新潟大学に行くことになった。メタンハイドレートは日本海の新潟沖に一番埋蔵されている。開発をさらに進めるために天が差配した」という言い方をしていました。

――追悼シンポジウムにご家族で参加され、お子さんたちの感想は？

主人が皆さんからこれほど慕われていたことに驚いたようです。家では無口で、大学での研究など子供たちに話すタイプではありませんでしたから。

――ご主人が土砂災害を志されたのは？

少年時代は宇宙が大好きで、NASAや宇宙飛行士にあこがれていたそうです。それが、故郷の長崎で教師になる道が内定していた京大4年生の時、ある出会いから大学院に進むことになり、選んだのが土砂災害でした。マイナーな分野だったことと、高校時代に体験した長崎豪雨が下地になっていたのかな、とも話していました。

福岡江里花夫人

北岡伸一 JICA理事長の弔文

昨年6月に新潟市内で執り行われた福岡教授の告別式に、国際協力機構の北岡伸一理事長から以下のような弔文が寄せられた。

「福岡先生には、ブータンを含め多数の国々における弊機構の事業におきまして多大なるご貢献を賜っており、私どもといたしましても突然の悲報に接し、大きな驚きと深い悲しみに打ちひしがれています。

ブータンでは、『道路斜面災害対策技術及び工法に関する案件化調査』の学術アドバイザーとして、日本が持つ斜面災害対策技術の現地への普及にご尽力いただきました。

ブータン以外にも弊機構は福岡先生には大変お世話になりました。日本と開発途上国の科学技術協力強化を目的とした弊機構の地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム事業におきましては、クロアチア、マレーシア、ベトナムでの各プロジェクトにご参加頂き、土砂災害対策に係わる研究と現地研究者の育成にご尽力いただきました。

また、専門家としてご参加いただいたエルサルバドルの『防災能力向上』プロジェクトでは、何度も現地を訪問していただき、大変熱心に現地関係者へのご指導を実施していただきました。

更に、トルコや、インドネシア、エチオピア、モーリシャスなど、非常に数多くの国々における調査にご参加いただいた他、中央アジア・コーカサス地域や中南米地域の防災対策行政官を対象とした日本における研修実施、アフリカからの留学生受け入れ等、様々な事業にご協力いただきました。

特に砂防技術の教育機関がないモーリシャスから来日し、先生のご指導を受け修士号を取得したデビチャランさんは、これからモーリシャス政府の中で行政官として斜面災害対策を一身に担っていきます。

福岡先生におかれましては、我が国が誇る斜面災害対策技術のスペシャリストとして、今後とも開発途上国の災害対策能力向上のために御協力を賜りたいと願っておりましたところ、この度の悲しい出来事は、私どもにとりましても無念でなりません。

私どもは、深い悲しみのうちにも、福岡先生の尊い志と情熱を受け継ぎ、開発途上国の斜面災害技術の発展のため、そして世界の国々との友好関係促進のため、より一層努力して参ります」

福岡夫人ら日本からの一行とブータンの人たち

キリスト教で読み解くヨーロッパ史 7
モンサン・ミッシェル

宗教研究家
橋本雄

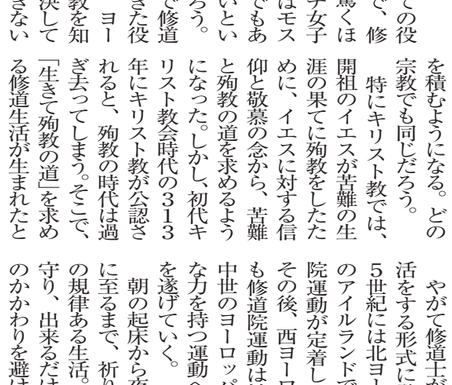
ヨーロッパを旅すると、一度は修道院を訪ねてみたくなる。パリから観光バスで西に3時間と少しのところにモンサン・ミッシェルがある。カトリックの聖地として有名な、海と泥の中に立つ修道院である。

8世紀に天使ミカエルの啓示で教会が建てられ、さらに10世紀に修道院が設けられてからは、文字通り「歴史の波と泥」の中で存在してきた。大天使ミカエルが、西北の位置でフランスを守っているのだという。ドーバー海峡の対岸の国を想定しているのか？

オーストリアにはドナウ川を見下ろす場所に、美しいバロック建築のベネディクト派メルク修道院がある。その壮麗さと芸術性の高さは必見だ。

モスクワ市内には15、24年に建てられたノヴォデヴィチ女子修道院がある。喧騒のモスクワ市内にあって静かで厳かな修道院は、疲れた観光客をしばしホッとさせる。

隣接の墓地はフルシチョフやエリツィンをはじめ多くの有名人の墓石が並んでいる。修道院横の池では、チャイコフスキーが「白鳥の湖」の着想を得たという。しかし、「この池に白鳥が来たことがなく、鴨しかいない」と案内人が言っていた。鴨を見て白鳥を連想したのであれば、芸術家の想像力は凄まじい。


モンサン・ミッシェル

修道院運動による信仰の純化

アイルランドの厳しい自然の中に立つ質素な修道院遺跡を見ると、修道生活の苦難が偲ばれる。

忘れられないのは、モールドバにあった断崖絶壁に穴を掘った修道院。一つの入り口を塞げば他者の侵入を許さないし、内部からの逃亡もできない。侵入してきたイスラム軍も攻撃できなかったという。そこで会った修道士には、「今の時代にこんな人物がいたのか」と驚かされた。

修道院運動はヨーロッパの各地に生まれ、キリスト教の歴史上、重要な役割を担ってきた。

本来、修道院は純粋な信仰生活を求める場所であったが、それだけではなく、聖書の転写や翻訳など、キリスト教文化、学術発展の担い手でもあった。さらには、貧民救済や医療奉仕、薬品の研究をはじめ、自給自足であったために地域の開墾と農業指導、様々な技術革新などの社会奉仕を行ってきた。

正教の修道院ではイコンの制作が修道士の重要な仕事であった。人々の暮らしを向上させるあらゆるものが修道院から出発した、と言って過言ではないくらいだ。

戦時には砦としての役割を担ってきたので、修道院の頑強さは驚くほど。ノヴォデヴィチ女子修道院も、過去にはモスクワ防衛の最前線でもあった。悪魔との戦いという意味もあるのだろう。

東西ヨーロッパで修道院が社会に与えてきた役割は計り知れない。ヨーロッパのキリスト教を知る上で、修道院は決して見過ごすことができないのである。

修道院運動の起源

多くの宗教は社会的に拡大し信徒が増えれば、やがては世俗化し腐敗してきた。すると、より純粋な信仰と高い霊的生活を求めて、世俗を離れる信仰者が現れる。都市での世俗化した信仰を嫌い、人里離れたところで修行者（隠者）もいた。一般的にキリスト教修道院運動の起源は4世紀のエジプトとされるが、それ以前から隠者の生活はあった。

古代教会時代、砂漠や洞窟、断崖絶壁の中で修道生活をする者が現れた。柱を立て、その上で修道生活をする「柱上の修道者（隠者）」もいた。一般的にキリスト教修道院運動の起源は4世紀のエジプトとされるが、それ以前から隠者の生活はあった。

やがて修道士が共同生活をする形式に発達し、5世紀には北ヨーロッパのアイルランドでも修道院運動が定着している。その後、西ヨーロッパにも修道院運動は拡大し、中世のヨーロッパで強大な力を持つ運動へと変貌を遂げていく。

朝の起床から夜の就寝に至るまで、祈りと奉仕の規律ある生活。独身を守り、出来るだけ世俗とのかかわりを避ける日々が続く。生活の全てが神とキリストへの献身と人々への奉仕である。

どうして厳しい生活に身を置くのか、何を求めているのかは、俗人には分からないかもしれない。召命感を持ってきた者、社会や組織から追放された者など様々な人々に、修道院は門を開いてきた。修道院は多様な人々を受け入れてきた懐の深さがある。

世俗の煩いが少ない分、学術や諸々の研究に集中できたのかもしれない。修道院の歴史もまた腐敗や世俗化との戦いであったが、魂と信仰の純化に生涯を捧げた人々がいたことは、キリスト教にとって幸いであった。

10人の正しい者

創世記18章に、淫乱と腐敗の街ソドムとゴモラを滅ぼすことを主張する神に対して、アブラハムがとりなしの問答をする場面がある。神は「正しい者が10人いたら滅ぼしはしない」と約束するが、結局ソドムとゴモラは汚名を残して審判の火と硫黄で街も人も焼かれてしまう。（創世記19章）

ヨーロッパの修道院運動はその「正しい10人」であったのかもしれない。純粋な信仰を求めた彼らがいたので、様々な腐敗、淫乱、殺戮が溢れても、ヨーロッパは発展し続けてきたと言えよう。

ソドムが滅ぼされる時に、アブラハムのおいロトと家族が救われ避難するが、脱出の際「決して振り返ってはいけない」と言われていたのに、その禁を破って塩の柱にされてしまったのがロトの妻である。修道士も一旦修道院に入ったら、過去を「振り返ってはいけない」。そんな修道士を多く生み出してきたのがヨーロッパのキリスト教である。